家庭教師ヒットマンREBORN ～リボーンに新しい教え子ができた話～

運の良いツチノコ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

運動も勉強もそれなりの普通の高校生〝北見和彦〟

そんな彼に衝撃の事実が告げられる。何と彼の父はイタリアの大手マフィアのボスであった。しかもその父からボスの座を継いでほしいと言われる。

あまりの事実に混乱する和彦に父が連れてきたのはスーツを着た赤ん坊で、しかもこの赤ん坊は和彦の立派なマフィアに育てるための家庭教師であると言い、和彦はさらに混乱することになる。

そして、リボーンによって和彦はほぼ強制的にマフィア学校に通う羽目になり…

これは沢田綱吉がボンゴレファミリーを継いだ跡の物語である。

目次

標的1　ええ!?？俺がマフィアの後継者 ―― 1
標的2　マフィア学校と温厚な校長 ―― 6
標的3　ヤンキー娘に絡まれた！ ―― 10
標的4　幼馴染はヒットマン!? ―― 16
標的5　炎が出る指輪と物が飛び出す匣 ―― 22
標的6　格闘娘と遭遇！ ―― 25

標的1　ええ⁉？俺がマフィアの後継者

俺は北見和彦。至って平凡な高校生、いや、平凡だったと言うべきか。俺は今、ハリウッドスターが乗ってくるようなリムジンに乗せられてる。リムジンに乗ってるのは俺だけでなく、俺を挟むように黒服の男が2人と、俺をこんな状況にしたスーツを着た赤ん坊も乗っている。

なぜ俺がこんな目に遭っているのかというと、それは数分前に遡る…

「おはよー、親父」

「ああ、おはよう和彦」

眠い目を擦りながら、俺はリビングでくつろぐ親父に挨拶をした。俺の両親は共働きで、現にお袋はとっくに仕事に行っていた。いつもなら父さんも仕事に行ってるはずなんだが、今日は有給を取ったらしい。

俺は終業式を終えたばかりで絶賛春休み中だ。忌々しい早起きをしなくていいって考えるだけで気分が良かった。

…だが、今日に限ってはなぜか親父に朝7時には起きろと言われちまった。なぜなのか聞いても、明日になれば分かると言って教えてくれない。そのせいで昨日は眠れなかった。

とりあえず、俺は歯を磨き、朝食を食べた。すると…

ピンポーン

「お、来たようだな」

そういって親父は玄関に向かった。親父の口振り的に親父の知り合いが遊びにでも来たのか？。それじゃあ、俺的には早起きした甲斐がないんだが⁉？

そう心で愚痴りながら、玄関を覗くと

「え⁉？」

俺は驚愕した、親父の隣にスーツを着た赤ん坊が立っていたからだ
「ん？」
俺から思わず出てしまった声が赤ん坊に聞こえたようで、赤ん坊がこちらに気づいて声を掛けてきた。
「お前が輝義の息子、和彦だな」
どうやら親父の知り合いらしいが、どこでこんな赤ん坊と知り合うんだ⁉？
「とりあえず入ってくれ、リボーン」
「ああ、邪魔するぞ」
そう言って親父が赤ん坊、リボーンを家に招いた。名前的に日本人ですらないのか？
そうこう考えてる間にリビングには俺と親父、そしてリボーンが座っていた。
すると親父が真剣な表情になり、口を開いた
「和彦、いきなりで驚くかも知れないが、俺はイタリアのマフィアのボスなんだ」
「え⁉？」
え⁉？親父がマフィアのボス⁉？　朝っぱらから衝撃の事実が告げられた。
「そして和彦、お前には俺の跡を継いでもらいたい」
「は⁉？」
そんでもって、俺が跡を継ぐ⁉？、もう意味が分からない
「まあ、驚くのは分かるがひとまず落ち着け」
「落ち着けるかよ‼？というか、お袋はこのこと知ってんのかよ⁉？」
「いや、裕子には何も教えていない」
「は⁉？もうわけわかんねぇよ‼？親父がマフィアとか、跡を継げとか‼？」
俺は混乱のあまりに声を荒げてしまった。すると、さっきから黙ってたリボーンが口を開いた。
「落ち着け、そんな興奮してちゃ、ろくに話も出来ねえだろ」
「はあ⁉？大体お前は何者なんだよ‼？いきなり家に来て、お前は一

体何がし・・・」
「うるせぇぞ‼?」
「ガハッ⁉?」
　俺は言い終わる前にリボーンに頬を蹴られた
「何すんだよ⁉?お前⁉?」
「少しは落ち着いたか?」
「はあ⁉?」
　リボーンは俺を蹴ったと思ったら、今度は俺の目を見て真剣に話し出した。
「いいか?輝義はお前こそが次期ボスに相応しいと思ったから、この話をしたんだ」
「俺・・・だから?」
「そうだ、そして俺はお前を次期ボスに相応しい人物に育て上げるためにここに来たんだ」
「俺を育てるため?」
「いうなれば、俺はお前の家庭教師だ」
「いや待てよ‼?親父の跡を継ぐってことは、マフィアになるってことだろ⁉?俺はそんなものになるつもりはないぞ‼?」
　普通に考えて当たり前だ、あんないつ死ぬか分からないような世界には行きたくない。俺は普通の生活を送りたいんだ。
　するとリボーンが下を向いて言った
「そうか、ならしょうがねぇな」
　分かってくれたか、と思った次の瞬間
　ドン‼?
「⁉?」
　突如、玄関が乱暴に開けられると同時に黒服の男が2人現れた
　その2人に向かってリボーンが
「連れて行け」
「ちょ⁉?何すんだ⁉?」
　リボーンの指示と同時に2人の黒服に俺を強引にリムジンに乗せられた。

まさか、秘密を知ったから口封じに⁉？
すると、リボーンもリムジンに乗り込んできた
「お、おい⁉？どこへ連れてく気だ⁉？」
「行けば分かるぞ」
「おい‼？待てよ⁉？」
戸惑う俺に親父はリムジンの前に来て
「大丈夫だ、リボーンを信じろ」
現段階では不可能なことを言ってきた。こんなことされて信じろ⁉？無理に決まってる‼？
「じゃあ俺は仕事があるから、あとは頼むぞリボーン」
「ああ、任しとけ輝義」
「ちょ⁉？親父⁉？助けて～‼？」
俺の言うことを無視して、リムジンは動き出した。

・・・・そして、現在に至るという訳だ。一体どこに連れていかれるんだ？
すると、さっきまで走っていたリムジンが止まった。それと同時にさっきまで黙っていたリボーンが口を開いた
「降りるぞ、和彦」
リボーンに言われるがままに、リムジンを降りるとそこは
「学校？」
「ああ、お前と同じようにマフィアの跡継ぎが通うマフィア学校だ」
「マ、マフィア学校⁉？」
「お前も明日からここに通ってもらうからな」
「はあ⁉？何言ってんのお前⁉？こんなマフィアだらけの学校に通うなんて命がいくつあっても足りねぇよ‼？」
「だからこそ、マフィア学校なんだ、お前はここでマフィアとは何たるかを知り、生き残る術を学ぶんだ」
淡々と説明するリボーンに対し、俺はこの理不尽な状況にもはや言

葉が出なかった。
　すると、リボーンはさらに追い討ちを掛けるように言った
「ちなみに逃げようとしても無駄だからな、とりあえず今日は下見だ、早く行くぞ」
　もう俺は考えるのを辞めた・・・

標的2　マフィア学校と温厚な校長

考えることを辞めた俺は促されるままにリボーンの後ろをついていった。

校舎の入り口の近くまで来ると、俺と同い年ぐらいの奴らが何人か俺たちも先に校舎へ入っていった。ぱっと見は普通の学生に見えたが、ここに来ると言うことはマフィアの関係者なんだろうか。

一気に不安になってきた俺はリボーンに疑問をぶつけた。少しでも安心できる答えを期待して。

「なあリボーン、やっぱアイツらもマフィアなのか？」

「ああ、大半はお前と同じ、身内がマフィア関係の奴らだ」

やっぱそうだよなぁ・・・

「どうした、顔色がわりぃぞ」

「お前のせいだよ・・・」

「そもそもマフィアの学校なんだ、生徒がマフィアなのは当たり前だろ」

「そりゃあ、予想はしてたけど・・・」

知りたくはなかったし聞きたくもなかった。安心するつもりで質問なんてした俺がバカだった。結果ますます不安になってしまった。

そうして不安を抱えながら俺は校舎に入った。

校舎の中は意外と奇麗だった。てっきりマフィアの学校だからすげぇ荒れてる思った。

そんなことを思いながら廊下を歩いていると、前を歩くリボーンの足が扉の前で止まった。

「よし、とりあえず教師に挨拶するぞ、気ぃ引き締めて入るぞ」

目の前の扉には「職員室」と書かれていた。

「ちょ、ちょっと待て!?気を引き締めろってどういうこと!?」

焦る俺にリボーンは口角を上げて言った

「入れば分かる、さあ入るぞ」ガラガラガラ・・・

「ああ！ちょ!?」

俺が言い終わる前に職員室の扉が開かれた。そこに広がる光景に

俺は口をあんぐりと開けてしまった。なぜなら
「(こ、この人たちが先生!?)」
いかにもヤバそう奴らがそれぞれのデスクでくつろうでいたからだ。さらに驚きの光景が目に浮かんだ。
「(あの人が持ってるのって銃!?ホンモノ!?)」
「(ああ!!こっちの人は剣!?)」
当たり前だと言わんばかりに、武器の手入れ?をしていた。すると
「なにビビってんだ、これぐらいこの学校じゃ普通の光景だぞ」
「な!?(う、?ー!?)」
このあり得ない状況に混乱している所にさらなる追い打ちをかけられた。
俺、明日からここに通うの!?
考えただけで、もはや恐怖しかない
恐怖で震えながらも職員室の奥に行くリボーンの後をついていくとリボーンが扉を指さした。
「ここが校長室だ」
「え?校長室?ということはまさか!?」
「そうだ、校長がお前を待ってるぞ」
「ええ!?、やだよ!!、会いたくねぇよ!!」
こんな怖い学校の校長なんて絶対ヤバい人に決まってる、死んでも会いたくない!!
「グダグダうるせぇぞ、もうここまで来たんだ、さっさと入りやがれ!」ゲシッ!
「うわっ!!」ドシン!!
リボーンに背中を蹴られて、強引に部屋に入れられてしまった
「痛ってー・・・」
背中がズキズキする
すると、部屋の奥から声が聞こえた
「へえー、君がアモールファミリーの後継者かー」
声のする方を見ると、長身の若い男性がほほ笑んでいた。金髪の髪型から、多分外国人だろう、というかアモールファミリー?

「よう、グランデ」
「やあ、リボーン」
　2人は軽い挨拶をしていた。見た感じ2人は友達か？というか
「あなたが校長？」
「うんそうだよ、マフィア学校校長のグランデです、よろしく」
　微笑みながら自己紹介をするグランデさんの声は不思議と心地よかった。
「あ、北見和彦です」
「よろしくね、和彦君」
「あのう、さっきあなたが言ってたアモールファミリーっていうのは？」
「お前が継ぐファミリーのことだぞ、輝義から聞いてねぇのか？」
「ないよ！一度だって！」
　俺の問いにリボーンが答えた、俺はグランデさんに聞いたんだけど
「というか、ずっと言ってるけど俺はマフィアになるつもりはないぞ」
　俺のその言葉にグランデさんが意外そうな顔をした
「え？跡を継ぐ決心をした上で来たんじゃないの？」
「違いますよ、リボーンに無理やり連れてこられたんです」
　そういうとグランデさんは何かに納得したように顔をした
「ああ、そういうこと」
「え？何が？」
　グランデさんは諭すように俺に
「なら、跡を継ぐかどうかは明日来てみてから決めれば良いんじゃない？」
「いやー、でも俺ほんとに・・・」
「グランデの言う通りだ、何事も行ってみなきゃ分からねぇだろ」
　リボーンもグランデさんに加勢しだした
「それにここは表の世界の進路も用意されている、卒業するだけでも意味はあるぞ」
　リボーンもグランデさんもあくまで真剣に言ってる、マフィアになんてなりたくないけど、

「じゃあ、ほんとに1日だけ」
まあ、せっかくだから1日行くだけなら・・・
俺がこういうとグランデさんは嬉しそうな顔で
「そうか！歓迎するよ、学校の教材とかは今日の夜に家に届けるから」
リボーンもまた、微笑みながら
「よく言ったな、和彦」
「ほんとに1日だけだからな！」
俺は語気を強めて言った。すると、グランデさんが
「1日だけでも嬉しいよ、和彦君」
と言った、ほんとにマフィアには見えない
「とりあえず、今日は帰りな」
「ああ、行くぞ和彦」
「え!?ああ！待てよリボーン！」
バタン
校長室の扉が閉められた。
1日行くだけ・・・ そう思ってたのに、その1日がとんでもない1日になるとは思ってもいなかった・・・

標的3　ヤンキー娘に絡まれた！

1日だけマフィア学校に行くという約束をしたあの後、グランデさんの言ってた通りに教科書や体操服が段ボールで届いた。なぜか段ボールの中に防弾チョッキも入ってた。明日が来て欲しくない・・・
全てが夢であってほしい・・・　そう思いながら俺は目を閉じた

そして、当日
俺は今、マフィア学校の前にいる。一応、防弾チョッキは中に着た。
ああ、入りたくねぇ、でも今日だけ行けば良いんだ。
意を決して俺は校舎に入った。
「(ここが俺の教室か)」
自分の教室を見つけ、深呼吸をして、教室の扉を開けた
「(あれ、意外と普通だな)」
荒れた雰囲気を想像してたけど、思ったより普通の風景で安心した
すると、1人の生徒に目が行ってしまった。ロングヘアの青い髪の女子生徒だった。
「(あの娘は・・・　まさかな)」
その娘を見た瞬間、ある疑問を浮かんだが、そんな訳がないと払拭した。
とりあえず俺は黒板に書いてある席に着いた。
そして、少し待ってると先生が来た。昨日、職員室で銃の手入れをしていた人だった。

何事もなく終わってくれた。今日はホームルームだけだった。あとは帰るだけだ。これでマフィア関連とはおさらばできる。そう思

いながら俺は校舎を出た。
　他の生徒に混ざるように帰ろうとしたその時、
「おい、そこのお前」
「ん？」
　声を掛けられた。女性の声だ。嫌々ながら声のした方へ向く
「アモールファミリーのボス候補、北見和彦ってのはお前か？」
　俺に話しかけてきたのは同じ教室にいた女子生徒だった。ショートの赤髪に鼻には絆創膏が貼られていた。顔は少し幼い印象だったが、いかにもヤンキー娘といった感じだ。
「あ、ああ、そうだ」
「へぇ、こんな弱っちそうなボス候補、初めて見たぜ」
「いや、俺はマフィアになるつもりはないんだ」
　なぜか目の前の女子生徒は俺がボス候補であることを知っていた。ボス候補になったつもりはねぇが、なぜ知っているんだ？
「はあ？何言ってんだお前」
「だから！俺はボス候補とかになったつもりはないんだ！」
「・・・　まあ、どうでもいいや、お前にその気がなくともボス候補であるお前を倒せば、アタイの力を学校中に証明できるってもんだ！」
　女子生徒がそういうと指に付けている指輪から赤い炎が出てきた
「指輪から炎が!?」
　そういうと女子生徒が意外そうに言った
「あ？まさか、リングと死ぬ気の炎を知らないのか？」
　リング？死ぬ気の炎？何だそりゃ？
「じゃあ、これは？」
　女子生徒がそういうとニコニコしながら、穴が空いた四角いものを取り出して、俺に見せた。
　一体何だ、ありゃ？
「ふん、何も知らないって顔だな？まあ、どうせお前はこのアタイに倒されるんだ、どうでもいいや!!」
　そういうと同時に炎が出ている指輪を四角いものの穴に嵌め込んだ。すると、

「!?（なんか出てきた!?）」
四角いものが開き、中から何か飛び出してきた
「あ、あれはハルバード!?」
女子生徒の手には赤い炎を纏ったハルバードが握られていた。
ゲームでしか見たことない。
「さあ、行くぜ!!おりゃ!!」
ドン!!
「あぶね!?」ヒュ!!
俺は間一髪でハルバードの攻撃を避けた。
「ちょ！待て!!」
「誰が待つかよ!!」
ドン!!
「ひっ!?」ヒュ!!
やばい！逃げないと!!
俺は門に向かって走り出した！このままだと命がない！
「逃すかよ!!」
シュン!!
俺の背に向かって赤い斬撃が飛んできた。
ヤバい！やられる!!
俺は壮絶な痛みを覚悟した。が、
バン!!
痛くも何ともなかった。かわりに後ろで爆発が起きていた。
すると、聞き覚えのある声がした
「チャオっす、生きてるか和彦？」
「リボーン！」
リボーンに間一髪で助けられた。アイツの手には拳銃が握られていたから、多分あの斬撃を撃って相殺したんだろう
「なんだこのガキ!?アタイの斬撃を相殺した!?」
リボーンが来てくれて安心した。まさか、リボーンがこれほど強いとは思わなかったが。これで助かったと思ったらリボーンが恐ろしいことを言い出した。

「おい和彦、こっから先はお前が何とかしろ」
「はあ!?何言ってるんだよ!?無理に決まってんだろ!?」
「いいか！お前はアモールファミリーのボスになる男なんだぞ！この程度のことででビビってちゃ、話にならねぇぞ！」
「そんなこと言ったって!!俺は喧嘩もしたことないんだぞ!!」
俺がそう言うと女子生徒が
「話し合いは済んだか？これで終いだ!!」
と言うと同時にさっきの赤い斬撃を飛ばしてきた
「もうだめだー!!」
俺は死を覚悟した。するとリボーンが
「・・・全くしょうがねぇな」
呆れ混じりに言うと拳銃を俺に向けてきた。
「一遍死ね！」
バン!!
リボーンの銃弾は俺の頭に命中した。俺、このまま死ぬのか？ああ、俺に無敵の力があれば、こんなことには・・・

「うおーーーー!!　復活《リッボーン》!!!　死ぬ気であの女を倒す!!」

～リボーンｓｉｄｅ～
突然、豹変した和彦に赤毛の女が動揺していた
「な!?雰囲気が変わった!?、おいガキ!!一体何をした!!」
「さぁなー、だが気をつけろよ？今の和彦は強ぇぞ」
実際は死ぬ気弾を撃った。赤毛の女も驚く今の和彦はパンイチで額から死ぬ気の炎が出ている。ぱっと見は変態そのものだが、今の和彦は死ぬ気モードだ！
さあ、暴れてこい和彦！
「うおーーーーー!!!」
和彦が赤毛の女に向かって勢いよく走り出した

「こんの!!」
シュン!!シュン!!シュン!!・・・・
赤毛の女が斬撃を続けざまに飛ばしてきた、が
和彦は難なく避ける
そして、和彦が赤毛の女の懐に入ろうというまさにその時、
「調子に乗るな!!」ズドン!!
赤毛の女がハルバードの先端で和彦を突こうとした、が
「とりゃー!!」
和彦はハルバードを飛んでかわし、そのままハルバードを踏み台にし、赤毛の女の頭上に一気に跳んだ
「な!?」
そして、そのまま
「おりゃーーー!!」
ボッコーン!!
赤毛の女にかかと落としを食らわせた、しかし奇麗に決まったな
「あ、が・・・」
赤毛の女は気を失ったようだな。とりあえずよくやったぞ和彦
シュウウン
和彦の額から死ぬ気の炎が消えた

～和彦ｓｉｄｅ～
シュウウン
「た、倒した・・・」
突然、力が沸き上がり、女子生徒を倒すことができた。というより死なずに済んだ。
ん？なんか肌寒いな？
自分の体を見てみると
「ええ!?　なんで俺パンイチ!?」
これじゃ変態じゃん！
「それは死ぬ気弾のおかげだぞ」

リボーンが俺の近くまで歩いてきた。というか何？死ぬ気弾？
「何かに後悔している者がこの弾に脳天を撃たれると、一度死に、後悔していることに対して死ぬ気になって生き返るんだ」
「死ぬ気になる？」
「ああ、さっきお前があの女を倒せたのもこの弾で死ぬ気になっていたからだ、現にお前は普段じゃ考えられないほど動けたんじゃねぇか？」
「あ、ああ、ほとんど無我夢中だったけど、普段の俺にはできない動きができてた」
「死ぬ気になってる間は身体中のリミッターを無理やり外しているからな、普段のお前じゃ到底不可能な動きも可能になるんだ」
「へぇー、でも、後悔してなかったらどうなるんだよ？」
「そのまま死ぬぞ」
「死ぬ!?」
恐ろしいものを撃ち込まれてしまった。俺が戦々恐々としていると、
「おい、お前・・・」
「な!?　ヤバい目覚めた!!」
さっきまで気を失っていた女子生徒が気が付いちまった！
逃げよう!!
そして、俺はパンイチのまま学校を後にした。

標的４　幼馴染はヒットマン!?

パンイチで学校から逃げたあと、俺を迎えに来た親父と鉢合わせた。そして、そのまま親父の車に乗って家に帰った。ちなみに、俺はあまりの疲れからか車の中で気がついたら終始爆睡していた

翌日…

「朝だ、起きろ和彦」

「んー… あと５分…」

眠い… やっぱ朝は苦手だ… リボーンが俺を起こしにきたのか？もうあんな学校行く必要ないんだから、早起きなんてしなくても…

「さっさと起きろ!!」

バーン!!

「グフッ!!」

リボーンの奴、俺のカバンを顔面に叩きつけやがった！クソいてぇ!!

あまりの痛さにベッドから転げ落ちてしまった。

「な、何すんだリボーン!!」

「オメェが起きねぇからだ、それよりお前に客が来てるぞ」

「え、客？」

誰だ？まさかマフィア学校の関係者じゃ!?

「今は玄関で待たせてる。早く来いよ」

そう言い残してリボーンは部屋を出ていった

だが、本当に誰だ？

まさか、昨日みたいに俺を殺しにきた奴が来たんじゃ!?

でもそれならリボーンが家に入れるわけが… あるなぁ

まあ、顔だけ出してさっさと帰ってもらおう

俺は寝癖がついた頭のまま玄関に向かった

すると、そこには見覚えのある女子が立っていた

「あ、かずくん」
「か、かずくん!?」
昨日たまたま目についたロングヘアの青い髪の女子生徒だった。昨日の赤い髪の女子生徒のような殺意はなさそうだ、とりあえず安心した。ていうか〝かずくん〟!?
「・・・ もしかして私のこと、覚えてない？」
「え？」
「昔、よく一緒に遊んだよ？」
昔？ 初めて顔を見た時も思ったが、この子どこかで・・・
思い出そうと俺はこの子の顔を凝視する。すると、なぜかこの子の顔が赤くなっていたが、とりあえず気にせず、記憶を遡る。
すると、ふと思い出した。俺が5歳の頃に常に一緒にいた女の子との思い出を。

＊＊＊

『わたしは大人になったらかずくんのおよめさんになりたい』
『じゃあ、おとなになったときにけっこんしよう！』
『うん』

＊＊＊

「もしかして!?　瑞樹!?」
「うん、久しぶり、かずくん」
　完全に思い出した！この子は幼馴染の〝宮永　瑞樹〟だ！
　ヤバい、めっちゃ奇麗になってる！　大人しい性格と淡々とした口調はそのままだけど
「ひ、久しぶり…」
「かずくん、変わってない」
「そうかな…　あはははは…」
　ヤバい、久しぶりすぎてなに話していいか分かんねぇ…

　ん？瑞樹があの学校にいたってことは、まさか…
　俺は冷や汗をかきながら瑞樹に聞いた
「なあ瑞樹、あの学校にお前がいたってことは…」
「うん、私、学生ヒットマン」
　マジでー!!　ていうか学生ヒットマンって何!?
　心でツッコミを入れてると、背後から聞き覚えのある声がした
「学生ヒットマンって何!?って顔してるな」
「リボーン！」
　声の主はリボーンだった。
「学生ヒットマンっていうのは、文字通りマフィア学校に通いながら、仕事をしている奴らのことだ」
「イカれてる…」
　俺は背筋がゾッとした。すると、リボーンが瑞樹を見つけるや否や
「ちゃおっす、宮永」
「ちゃおっす、リボーン」
　瑞樹に挨拶をした。え？瑞樹とリボーンって知り合いなのか？
「え!?リボーン、何で瑞樹のこと知ってんだよ!?」
「昨日、お前があの赤毛の女の生徒を倒して逃げたあと、俺はグランデにあの戦いのことを報告してたんだ。で、報告が終わって帰ろうとしたときにな…」

＊＊＊

『ねぇ』
『うん？』
『さっき戦ってたのってかずくん？』
『なんだ、宮永じゃねぇか？ここの生徒だったのか』
『うん、久しぶり、リボーン』
『で、そのかずくんってのは北見和彦のことか？』
『うん』
『お前、アイツを知ってんのか？』
『幼馴染』
『そうか、そりゃ驚いた』
『とりあえず会いたい』
『フッ、意外とアイツも隅に置けねぇな、いいぜ、会わせてやる』
『ホントに？』
『その代わり、少し俺の手伝いをしてもらうぞ』
『？』
『まあ、かなり難しいことだが、幼馴染のお前なら大丈夫だろう』
『分かった。何をすればいい？』

＊＊＊

「というわけで、宮永にここの住所を教えたんだ」
「何勝手に人の住所教えてんだ！」
「別に減るもんじゃねぇし、いいだろう、それにこんないい女がお前に会いたいと言って来てるんだ、会わねぇ方がもったいないだろ」
「ちょ!?おまっ!?、瑞樹をそんな風に言うな！」
　つい口調を荒げてしまった。すると、終始表情一つ変えないでやりとりを聞いていた瑞樹が口を開いた。
「かずくん」
「ん？瑞樹？」
「学校行こう」
「はあ!?」
　突然、何を言い出すかと思えば、多分リボーンの仕業だな
「ほら、さっさと準備して行ってこい」
　やっぱか、コイツ！
「ふざけんな！1日だけって約束だろ!?」
「ああ、これはグランデに聞いたんだけどな、昨日は初日ということで、どのクラスも出席を取ってなかったらしいんだ」
「そ、それがなんだよ!?」
「だから、昨日のは1日にカウントされてないということだ」
「めちゃくちゃな理屈だ!!」
「つべこべ言ってねぇで、準備しやがれ！」
　そう言うとリボーンは俺に銃を突き付けてきた。理不尽だ!!
「わ、わかったよ！」
　そういうと俺は半泣きで身支度を整えた。
「準備できた？」
　瑞樹が俺に聞いてきた
「あ、ああ」
　戸惑いつつ返事をすると
「じゃあ行こう」

そういうと、瑞樹は俺を手を強引に引っ張って、玄関を出ようとした。
すると、その弾みでバランスを崩し
「おわっ!!」
瑞樹の方へ倒れそうになった。が
「大丈夫?」
瑞樹が俺の身体を受け止めていた。やっぱ、ヒットマンゆえに身体の鍛え方が違うのか?
「あ、ああ、ありがとう」
「じゃあ行こ」
また俺の手を強引に引っ張ろうとした、
「ま、待てよ!靴を履かせてくれ!」
少し語気を強くして言った
そして、俺は手早く履き慣れた靴を履いた
「それじゃあ、気をつけてな」
リボーンが俺たちを見送りながら言った。
アイツ、勝手に部屋漁ったりしないよな!?
ん?そういえば学校は遠いから車で行ってたよな?
「なあ瑞樹、ここから学校まで遠い、どうやって行くんだ?」
まさか歩いて行くなんて言わないよな!?
俺が不安になっていると
「あなたのファミリーの人の車で行く、ここへ来る時もその人の車で来た」
そう言って指を指す瑞樹の先には黒い車が停まっていた
良かった、ちゃんとした移動手段だ、とりあえず安心した
あと、しっかり訂正しておこう
「俺のって、俺はマフィアになるつもりはない」
そういうと瑞樹は表情を一切変えずに
「そうなの?私はてっきり、お父さんの後を継ぐのかと」
「継がないよ!」
そんな会話をしながら、俺は瑞樹と車に乗り込んだ

標的5　炎が出る指輪と物が飛び出す匣

俺は今、瑞樹と車で行きたくもない学校へ向かっている。どうせ着くまで暇だから、気になったことを瑞樹に聞いてみることにした。学生ヒットマンである瑞樹なら知っているだろうから

だが、その前に

「なあ瑞樹」

「ん？」

「お前、リボーンといつから知り合いなんだ？」

「結構前から、私のお師匠のお師匠なの」

「え!?（アイツいくつだよ!?）」

疑問がさらに生まれたが、俺はもう一つの疑問を瑞樹に聞いた

「あと、その指輪は一体なんなんだ？炎が出るみたいだが？」

俺が気になったものは2つある。その1つが炎が出る指輪だ。昨日の赤い髪の女子生徒も付けていたし、今、隣にいる瑞樹の指にも付いている。瑞樹のはただの指輪って可能性もあるが、瑞樹はヒットマンだ。赤い髪の女子生徒と同じ炎が出る指輪で間違い無いだろう。

「炎？死ぬ気の炎のこと？」

「死ぬ気の炎？」

「かずくん、何も知らないの？」

「知るわけないだろ・・・」

一昨日まで普通の生活してたんだぞ・・・

「じゃあ教える、リボーンにも頼まれたし」

リボーン・・・ なんか釈然としないけど、知っとかないと命がない気がするし、よく聞いとくか

「死ぬ気の炎は、裏社会に伝わる生体エネルギーを圧縮して視認できるようにしたもの」

「エネルギー？炎じゃないの？」

「見た目が炎に似ているからそう言われてだけ、実際、熱は帯びているけど、何かを燃やすことはできない、ほら」

そう言うと、瑞樹の指輪、もといリングから青い炎が出た。そして、

それを顔に押しつけてきた！
「熱っ！いきなり何すんだ！」
「ごめん、実際に触った方が伝わると思って」
「だからってな！」
　昔から瑞樹はたまに突拍子もないことをする時があったが、今のは危険すぎる
　そう思いながら、瑞樹の炎には少し気になるところがあった。
「というか青色？赤じゃねぇのか？」
　昨日の赤い髪の女子生徒は赤い炎、もとい死ぬ気の炎を出してた。だが、瑞樹のは青く、水のように揺らめいている。どういうことだ？
「死ぬ気の炎はそれぞれ大空、嵐、雨、晴、雷、雲、霧の７種類ある。私のは雨の炎だから青色、かずくんが見たのは嵐の炎」
　雨？嵐？天気予報か？
「死ぬ気の炎の使い道はいろいろあるけど、１番は匣兵器を開けられること」
「匣兵器？」
「これ」
　そういうと瑞樹はポケットから見覚えのある四角いものを取り出した。
「これ、昨日の赤い髪の女子生徒も持ってた！」
「匣兵器」
「匣兵器って言うのか？」
「うん、この穴に炎を注入すると武器が出てくる」
　武器？ということは
「じゃあ、この中には瑞樹の武器が入ってるのか？」
「いえ、私の武器はこれ」
　そう言うと、手に持っている細長い袋を俺に見せてきた。
「それに私の匣兵器は・・・・」
　キキー!!
　瑞樹が何かを言い終わる前に車が急ブレーキをかけた
「ど、どうかしたんですか!?」

「あれを!!」
運転手が前方を差した。そこには恐ろしい光景が繰り広げられていた
複数のスーツ姿の男たちが金髪の女の子を寄ってたかった攻撃していた
俺がその恐ろしい光景に動揺する中、瑞樹は
「あの娘の制服、うちの学校のものよ」
ということはこれは、マフィアの仕事の真っ最中!?
だとしても、あの人数を1人では無謀すぎる!
「た、助けねぇと!!」
俺が焦って車から降りようとすると
「待って」
瑞樹に手を掴まれた
「これを」
そういうと瑞樹からあるものを渡された。それは
「これって、リングと匣兵器?」
「うん、リングは指にはめておいて」
「わ、分かった」
リングを中指にはめると俺は瑞樹と共に車から降り、男たちの集団に向かっていった。

標的６　格闘娘と遭遇！

「はっ!!」
　グハー!!
「とりゃー!!」
　グフッ!!
　目の前の金髪の女子生徒はどんどん男たちを倒していたが
「はあ…　はあ…」
　微かに息切れしている。このままだと押し切られる！
「お、おい!!」
　ヤベェ！つい反射的に叫んでしまった！
「あぁ!?なんだテメェは!?」
「!?（あの制服、僕と同じ!?　まずい!!）」
　まずい！助けようとは言ったものの、この人数を俺と瑞樹だけで!?
「ええい!!テメェらも殺してやる!!」
　男がバットで俺の頭を殴りつけようとしていた
　ヤベェ!!身体が動かない!!死ぬ!!
　俺は恐怖のあまり目をつむった
「ガハー!!」
　しかし、どこも痛くない、あれ？
　恐る恐る目を開けると
「え!?」
　男がうずくまっていた
「下がって、あなたは私が守る」
　そういう瑞樹の手には日本刀が握られていた
　女の子に守ってもらうのは男として少し情けねぇが、仕方ねぇ…
　だが、少しでも俺に出来ることはないのか？
　そうこう考えていたら
「おい!!アイツらもマフィア学校の生徒だ!!ぶっ殺せ!!」
　オラーーー!!
　リーダー格の大柄の男の号令と共に一斉に男たちがこちらに襲い

かかってきた！
　すると、金髪の女子生徒が
「僕が時間を稼ぐ！早く逃げろ！」
　ダメだ！逃げたら、この子は絶対助からない！
「いや、俺たちも戦う！お前を放って置けねぇ！」
　俺がそう言うと続いて瑞樹も声を上げた
「元よりあなたを助けるつもり、いまさら引くつもりはない！」
「君たち・・・
　分かった！恩に着る！」
　金髪の女子生徒も改めて臨戦体制をとる。
「くたばれ!!」
　男の1人が鉄パイプで金髪の女子生徒を殴ろうと振りかぶる
「お前、危ねぇぞ!!」
　しかし、
　ガキーン!!
　金髪の女子生徒が蹴りで向かってきた鉄パイプを破壊した！
　そしてそのまま、
「とりゃ!!」
　グハー!!
　後ろ回し蹴りで男の腹を蹴り飛ばした！
　強い！だが、鉄パイプを破壊するなんて、いくら何でもおかしいだろ!?
　そう思いながら、彼女の足元を見ると黄色い炎を纏っていた
「あれは死ぬ気の炎!?」
　そういえば、瑞樹が死ぬ気の炎は7種類あると言っていたな。
　ん？炎？匣？
　そうじゃん！俺も戦えるじゃん！瑞樹からもらったリングと匣使えば!!
　よーし、それじゃあ早速、リングに炎を・・・
　・・・　あれ、どうやるんだ!?
　気づけば見る見る男たちは倒されていった。

残ったのはリーダー格の大柄の男だけとなった。
「残りはあなただけ」
瑞樹が遠回しに投降を促すが、男は聞く耳を持たず、
「この・・・ クソアマァ!!」
男はサーベルを取り出し、瑞樹に斬りかかった！
すると、瑞樹は呆れるように
「剣は振り回せば良いわけじゃない」
と言い放ち、瑞樹は日本刀を構え、男に向かっていった。
「時雨蒼燕流　攻式八の型・・・」
「死ねぇ!!」
男がサーベルを振り上げたと同時に
「グハー!!」
男は瑞樹の斬撃を浴びた
「・・・ 篠突く雨」
それを見た俺は思わず
「す、すげー・・・・」
と口に出していた
それに続くように金髪の女子生徒も
「(この剣士、出来るな・・・)」
と心の中で思った。
何とか終わったかー！でも俺、何の役にも立たなかったなー・・・・
でもまあ、この娘は助けられた
「お前大丈夫か?」
俺は金髪の女子生徒に声を掛けた
「ああ、おかげで助かった、改めて恩に着る！」
元気な返事が帰ってきた
「俺は北見和彦、こっちは宮永瑞樹」
俺は自己紹介をした
「僕は佐々木　遥だ。よろしく！」
なんて会話をしていたら、

「皆さーん、そろそろ学校へ向かいましょう！」
運転手が俺たちを呼んだ
「あ！そういえば！、良かったら佐々木も乗ってくか？、瑞樹良いだろ？」
「構わない」
「なら、お言葉に甘えるよ」
こうして、俺は瑞樹と佐々木と共にようやく学校についた！